関西学院大学リポジトリ
Kwansei Gakuin University Repository

幼少期の身体接触経験と現在の接触抵抗感や愛着との関連

著者	原田 萌，桂田 恵美子
雑誌名	関西学院大学心理科学研究
巻	48
ページ	43-48
発行年	2022-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10236/00030147

幼少期の身体接触経験と現在の接触抵抗感や愛着との関連

原田　　萌*・桂田恵美子**

抄録：本研究では幼少期に主要な養育者から受けた身体接触と大学生の接触抵抗感，愛着との関連を検討した。大学生 147 名を対象に質問紙調査を行った。その結果，幼少期の主要な養育者からの身体接触が多いほど，現在の接触抵抗感が低く，主要な養育者に対する愛着が安定していることが示された。これらの関連から，幼少期に主要な養育者からポジティブな身体接触を受けることにより，安定した愛着を形成し，内的作業モデル（Internal Working Model）を通して現在もその愛着が継続されていることが示唆される。しかし，本研究では，幼少期の身体接触は大学生の回想法によるものであるという限界があるため，今後はこの限界を克服した研究が期待される。

キーワード：愛着，接触抵抗感，大学生，身体接触，タッチ

私たちは日々生活する上で，落ち込む友人を慰めるために背中をさすったり，泣いている子を抱き上げたりなど，タッチ（身体接触）を多く経験する。また，それに伴う否定的・肯定的な感情も多く経験している。心理学においてタッチは非言語的コミュニケーションの一つであり，ただ単に体に触れる行動ではなく心にも触れる情緒的なものである（Kepner, 1987）。タッチが心地よいと感じた場合は，脳にある下垂体後葉から排出されるオキシトシンにより，心身に幸福感や安堵のような肯定的な感情，または身体の痛みの軽減や血圧低下などの生理的な効果をもたらすことが近年の研究によって明らかにされている（Moberg, 2011）。

心地よいタッチは子供の健全な発育を助長し，特に生後間もない乳児と養育者間のタッチは子供の成長と深い関係があるとされている。過去の研究によると，孤児院で生活する，もしくは親がいない子供はそうでない子供に比べて，生後 1 年以内の死亡率が高いことが明らかにされている（Takeuchi et al., 2009）。また，Harlow（1959）の研究によると，アカゲザルの代理母実験ではミルクの供給等の生理的な飼育環境は同等であるにも関わらず，子ザルの肌触りの良い代理母へ抱きつく時間は針金でできた代理母よりも長く，生存率も高かった。このように子供にとってタッチを通して肌に直接触れられる行為は，親子間の信頼と子供の健やかな成長を築く上で必要不可欠である。

しかしながら，全てのタッチが心身に肯定的な効果をもたらすとは限らない。知らない人から不意に触られることや，セクシュアルハラスメントのようなタッチは否定的な感情を生じさせる。山口（2010）は，触る・触られる二者の関係性に着目して身体接触が不安に及ぼす影響を検討した。その結果，親密な二者においては身体接触によって触覚抵抗が低い者の不安が低下し，触覚抵抗が高い者は身体接触によって不安が高まった。また，初対面の二者においては両者の不安が身体接触によって低減したのに対し，半知りの二者においては触られる者のみ身体接触が不安の低減につながることが明らかとなった。

それではタッチに対する抵抗感や好感度を決める要因は何であろうか。過去の身体接触経験に着目した Jones & Brown（1986）は，幼少期のタッチ経験と大学生のタッチ行動・態度との関連を検証した。その結果，幼少期のタッチ経験が多い学生の接触回避傾向がより低いことが示され，幼少期のタッチ経験と大学生の接触回避傾向が関連していることが明らかにされた。しかし，幼少期のタッチ経験の頻度だけが青年の接触抵抗感の要因ではない。タッチ経験の質も考えなければならない。なぜなら，身体的虐待や性的虐待もタッチ経験に含まれるからである。実際，Jones & Brown（1986）で測定されたタッチ経験は，暴力や虐待を含まないポジティブなものである。また，Maier et al.,（2020）は子供時代の虐待と大人の対人距離やタッチに対する好悪感との関連を検討し，子供時代に虐待的行為を多く受けた人が虐待経験のない・少ない人に比べて，より長い対人距離とタッチへの不快感を表すことを明らかにした。

*関西学院大学文学部総合心理科学科 4 年
**関西学院大学文学部教授

このようにタッチに対する抵抗感についての先行研究は，子ども時代のポジティブなタッチ経験はその後のタッチ抵抗感をやわらげ，ネガティブなタッチ経験はタッチに対する抵抗感を強めることを示唆している。この幼少期のタッチ経験と大人になってからの接触抵抗感の関連は愛着（attachment）によって説明できる。愛着とはBowlby（1988）によって提唱された「人が特定の他者との間に築く緊密で情緒的な結びつき」である。数井・遠藤（2005）によると，愛着を築く中で，愛着対象と交わされた過去の相互作用経験，ならびに現在の相互作用に基づいて内的作業モデル（Internal Working Model：以下 IWM）が構築される。主に乳児期に形成された IWM は乳児期以降にも般化されることで生涯において，対人関係・社会適応性・パーソナリティー等にも影響を及ぼすという。山口（2018）は幼少期に養育者から受けたタッチは愛着の安定と深いつながりがあると述べており，養育者とのタッチ不足は愛着における適切な IWM の構築に影響すると考えられている。

日本人を対象に子供の頃に周りの人から受けたタッチが大学生の愛着・うつ傾向にどのように働きかけるか調査したのが Takeuchi et al.（2009）である。この研究の結果，子供時代早期のタッチ経験は自己観には影響せず，他者観のみに影響を及ぼすことが明らかとなった。この結果により，子供時代の親からのタッチは愛情表現の反映として認知され，幼少期の親からのタッチは肯定的かつ安定的な他者観を築くことに繋がると考察された。また子供時代に親からのタッチが不十分だった場合は，うつ病の高い発生率と重症度に関連していることも示された。これらの研究結果によって，子供時代に親から受けるタッチが少ない場合は，その後の鬱や愛着の発達にも影響を及ぼしていることが明らかとなった。

相越（2009）は幼少期の身体接触量，青年期の愛着スタイル，現在の身体接触量，模擬カウンセリングでの身体接触経験の関連を検討した。その結果，女性においては安定型愛着スタイルの人は幼少期の身体接触が多く，回避型愛着スタイルでは少なかった。また，安定型は回避型よりも，現在の身体接触量が多く，触れる・触れられることへの評価もポジティブであり，模擬カウンセリングにおいてもタッチを肯定的に評価していた。これらの結果から，幼少期の身体接触量が青年期の安定した愛着形成に貢献し，その安定した愛着がタッチに対するポジティブな評価をもたらしていると考えられる。

小野塚・桂田（2019）も大学生の被接触好悪感と愛着の関連を検討した。この研究では，他者から触れられることにどれほど抵抗があるかを示す被接触好悪感尺度を作成し，大学生の恋愛感情を持たない同性の友人からの被接触好悪感と関係尺度（RQ）によって分類された 4 つ愛着スタイル「安定型」「拒絶型」「とらわれ型」「恐れ型」との関連を調べた。その結果，安定型ととらわれ型が拒絶型より同性の友人からの接触を快と感じることが明らかになった。この結果は，安定した愛着を有する人が触れられることに抵抗が少ないという点で，相越（2009）の結果と一致している。

愛着とタッチの関連を検討した先行研究には母親と乳幼児を対象としたものが多く，相越（2009）や小野塚・桂田（2019）のように青年期や大学生を対象に検討したものは数が少ない。また，小野塚・桂田（2019）の研究では過去の被接触経験について測定されておらず，幼少期の被接触経験と愛着の関連は不透明である。また，相越（2009）や小野塚・桂田（2019）の研究では，青年期の愛着は一般他者への愛着を測定しているので，父親・母親に特化した愛着との関連は不透明である。そこで，幼少期の被接触経験と大学生の愛着と接触に対する評価を同時に測定することによって，過去のタッチ経験と現在の愛着やタッチに関する評価との関連に関して新たな知見を得ることができると考える。

本研究では，幼少期に受けた身体接触経験を測定する尺度と，現在の父母への愛着を測定する尺度と，接触抵抗感を測定する尺度を用いて，幼少期に受けた身体接触と大学生の接触抵抗感，愛着との関連を検討する。なお，本研究での身体接触，タッチはポジティブあるいはニュートラルなもので，虐待に関連するネガティブなものは含んでいない。

先行研究の結果をもとに，以下の 3 つの仮説を立てて検証する。(1) 幼少期に親（主要な養育者）から受けた身体接触経験の多さと大学生の現在の接触抵抗感は深く関連しており，幼少期に親（主要な養育者）から受けた身体接触が多いほど，現在の接触抵抗感が低い。(2) 現在の接触抵抗感と愛着の安定には関連があり，主要な養育者への現在の愛着が安定しているほど，接触抵抗感が低い。(3) 幼少期に主要な養育者から受けた身体接触の多さと愛着には関連があり，幼少期に受けた接触が多いほど，主要な養育への現在の愛着が安定している。

方　　法

調査参加者　本調査は日本の大学に通う大学生 147 名に実施し，そのうち回答の不備がある者を除いた 146 名（男性 53 名，女性 93 名）を分析対象とした。平均年齢は 19.17 歳（SD = 1.18，範囲：18～25 歳）であった。

質問紙　質問紙は基本的属性を問うフェイスシートと幼少期の主な養育者を問う設問，「スキンシップ尺度」，「IPPA（Inventory of Parent and Peer Attachment）邦訳版」，「触覚抵抗感尺度」から構成されていた。

フェイスシート　基本属性として，学部，学年，年齢，性別を尋ねた。

スキンシップ尺度　幼少期（3-5 歳）の身体接触量を測定するために Katsurada（2012）が作成したスキンシップ尺度を使用した。この尺度は，幼児を養育している者が毎日の生活の中で，その幼児とどの程度スキンシップをとっているかを問う計 12 項目から構成されている。これらの項目は全てポジティブあるいはニュートラルな身体接触を表している。今回の調査対象は大学生であるため，幼児期にもっとも親密であった主要な養育者（母親・父親・その他）を選択させた上で，その主要な養育者からのスキンシップについて，幼児期を想起させるように設問の表現を過去形に書き換え（例：「お風呂に一緒に入る」から「お風呂に一緒に入った」），回答させた。主要な養育者と幼少期の生活で，どの程度スキンシップをとっていたかを「していなかった（1）」～「いつもしていた（4）」の 4 件法で回答を求めた。得点が高いほど幼少期の身体接触量が多いことを示す。本研究での信頼性は，Cronbach の α 係数が .88 であった。

愛着尺度　大学生の愛着を測定するために Armsden & Greenberg（1987）が作成し，桂田・杉原（2003）が邦訳した IPPA（Inventory of Parent and Peer Attachment）邦訳版を使用した。この尺度は，若者の母親・父親・友人との愛着関係を測定するものである。「母は私の気持ちを尊重してくれる」などの信頼感（10 項目），「私の気持ちが不安定になっている時，母は言わなくても分かる」などのコミュニケーション（9 項目），「私の問題を母と話し合うのは馬鹿馬鹿しく感じる」などの疎外感（6 項目）の 3 つの下位尺度，計 25 項目で構成されている。本研究では母親・父親×25 項目で計 50 項目を用いた。現在の親との関係について「ほとんどあてはまらない（1）」～「だいたいいつもあてはまる（5）」の 5 件法で回答を求めた。信頼感・コミュニケーションでは得点が高いほど，疎外感では点数が低いほど親に対する愛着が安定していることを示す。本研究での信頼性は，Cronbach の α 係数が尺度全体で .96，信頼感で .93，コミュニケーションで .93，疎外感で .84 であった。なお，オンライン調査においては回答の信頼性を保つために，Instructional manipulation check 項目への回答を求めた。

触覚抵抗尺度　接触抵抗感を測定するために，山口（2010）が作成した触覚抵抗尺度を使用した。この尺度は「他人に触られるのは嫌だ」等の触られることに関する 7 項目，「親しくない人には触れられない」等の触れることに関する 3 項目の計 10 項目から構成されている。「全く当てはまらない（1）」～「非常に当てはまる（5）」の 5 件法で回答を求めた。得点が高いほど，身体接触を好まないことを示す。本研究での信頼性は，Cronbach の α 係数が .79 であった。

手続き　本調査は大学の授業の一部の時間を使って質問紙を配布し，その場で回収した。また一部の参加者においては，Google フォームを用いたオンライン調査で回答を回収した。

分析方法　データの処理や分析は，Excel 用フリー統計ソフト HAD 16_302（清水，2016）を用いて行った。

結　　果

（1）幼少期の身体接触と現在の接触抵抗感

Figure 1 は幼少期の身体接触量における接触抵抗得点を示した。スキンシップ尺度得点は合計平均得点の中央値によって，幼少期の身体接触量が高い群（高群）・低い群（低群）に分けた。幼少期の身体接触量（高群・低群）を独立変数，平均接触抵抗得点を従属変数とした対応のない平均値に関する等分散を仮定しない Welch の検定を行ったところ，2 群の間に有意な傾向が見られた（$t(139.99) = 1.66$, $p < .10$, $d = .28$）。

（2）青年期の愛着と接触抵抗

幼少期の主要な養育者が母親と答えた人は 132 名，父親と答えた人は 7 名，無回答が 7 名であった。無回答の者は分析から除いた。愛着尺度得点は，主要な養育者が母親と回答した人は母親への愛着得点，父親と回答した人は父親への愛着得点を用いた。つまり，この得点は幼児期の主要な養育者に対する現在の愛着得点ということになる。点数が高いほど安定した愛着を示すように逆転項目を反転させた上で，合計平均得点を用いた。愛着得点は合計平均得点の中央値によって，愛着が高い群（高群）・愛着が低い群（低群）に分けた。愛着低群の接触抵抗得点平均値は 3.18（SD＝0.75），高群の平均値は 2.98（SD＝0.88）であった。愛着を独立変数，平均接触抵抗得点を従属変数とした対応のない平均値に関する等分散を仮定しない Welch の検定を行ったところ，2 群の間に有意な差は見られなかった（$t(132.89) = 1.37$, $p = .17$）。

（3）幼少期の身体接触と青年期の愛着

Figure 2 は幼少期の身体接触量における大学生の主要

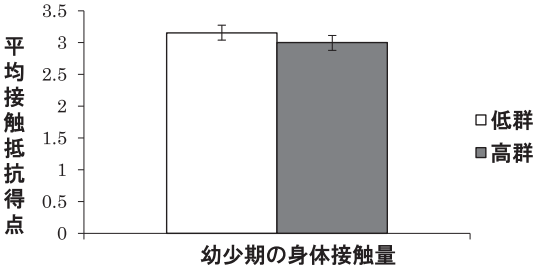

Figure 1　幼少期の身体接触量（低群・高群）における接触抵抗得点。

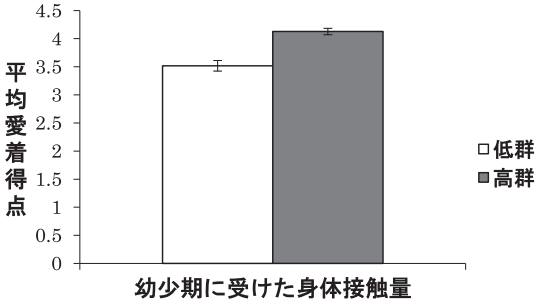

Figure 2 幼少期の身体接触量（低群・高群）における主要な養育者への愛着得点。

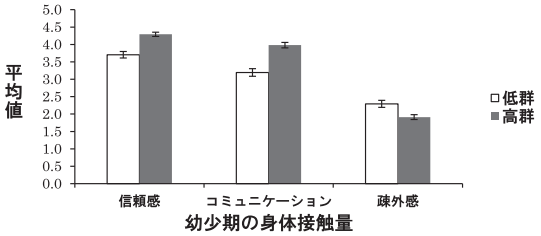

Figure 3 幼少期の身体接触量（低群・高群）における主要な養育者への愛着下位尺度得点。

な養育者への愛着得点を示す。幼少期の身体接触量（低群・高群）を独立変数，平均愛着得点を従属変数とした対応のない平均値に関する等分散を仮定しない Welch の検定を行ったところ，2 群の間に有意な差が見られた（t（102.482）＝−5.549, p＜.001, d ＝−.99）。

結果をより詳しく検討するために，下位尺度ごとの分析を行った。Figure 3 は幼少期の身体接触量における愛着下位尺度得点（信頼感・コミュニケーション・疎外感）を示した。幼少期に受けた身体接触量を独立変数，各下位尺度得点を従属変数とした対応のない平均値に関する等分散を仮定しない Welch の検定を行ったところ，全ての下位尺度得点において 2 群間の有意な差が見られた。信頼感得点：t（108.471）＝−5.27, p＜.001, d ＝−.93；コミュニケーション得点 t（114.268）＝−5.83, p＜.001, d ＝−1.02；疎外感得点 t（113.046）＝3.11, p＜.005, d ＝.54。

考　　察

本研究の目的は，幼少期に主な養育者から受けた身体接触経験が大学生の主要な養育者に対する愛着や接触抵抗感に与える影響について検討することであった。そのために大学生を対象に質問紙調査を実施し，（1）幼少期に親（主要な養育者）から受けた身体接触が多いほど，現在の接触抵抗感が低くなる。（2）主要な養育者に対する現在の愛着が安定しているほど，接触抵抗感が低い。（3）幼少期に主要な養育者から受けた身体接触が多いほど，その主要な養育者に対する愛着は大学生になった現在も安定しているの 3 つの仮説について検討した。

まず，幼少期に受けた身体接触が多いほど，現在の接触抵抗感が低くなるという仮説 1 は有意傾向であるが，支持された。藤田（2013）によると，幼少期に受けた身体接触と現在の身体接触の関連について，両親からの身体接触が多いと，人に対する信頼感や安心感を持つことを学習し，友人に対しても親しみを込めた身体接触による表現を多くするという。このことから，本研究でも幼少期に受けた身体接触により，身体接触に対してポジティブな経験を育んだことが，大学生の接触抵抗感の低さに繋がったと考えられる。

次に，現在の愛着が安定しているほど，接触抵抗感が低いという仮説 2 は支持されず，小野塚・桂田（2019）や相越（2009）の先行研究の結果と一致しなかった。先行研究との不一致の原因の一つとしては，愛着を測る尺度の特性の違いが考えられる。先行研究では愛着は関係尺度（RQ）や IWM 尺度を使って測られた一般他者に対する愛着であり，自己観・他者観を軸に愛着スタイルが決められるものであった。しかし，本研究では愛着対象を主要な養育者に絞った IPPA を用いて愛着を測定したため，愛着の安定性はあくまでも主要な養育者に対してのものであり，一般他者に対する愛着で測定される他者観はあまり反映されていないと考えられる。Takeuchi et al.,（2009）が幼少期のスキンシップによる愛着は大学生の他者観のみに影響したと述べていることから，幼少期の愛着と関連する現在の接触抵抗感も他者観にのみ関連しており，他者観を反映していないと考えられる父母に対する（IPPA）とは関連を示さなかったと思われる。

戸田・松井（1985）は大学生の女子における愛着や親密度は，母親よりも恋人や友人との間で高いと指摘しており，酒井（2001）も青年期には母親よりも同世代の恋人や友人が愛着対象としての信頼が高まることを示している。このように，青年期になると，愛着対象は必ずしも幼少期の主要な養育者ではなくなるため，IWM を測定する一般他者への愛着とは関連が見られるが，親（幼少期における主要な養育者）への愛着に特化すると関連が見られないことが考えられる。そのため，今後の研究では，愛着対象を両親に限らず，友人・恋人なども対象に含めた愛着尺度を用いた検討が必要であると思われる。また，本研究で使用した接触抵抗尺度も再検討の余地がある。山口（2010）によると，接触抵抗感の生じやすさは初対面の人・半知り・親密な人など，触る・触られる対象によって異なる。本研究で使用した触覚抵抗尺度には接触者の指定がない項目も存在していたため，触る・触られる人の想像が回答者によって違いがあったことが考えられる。今後の調査では，接触者や接触状況の教示を入れる，あるいは実際に様々な間柄での触れる・触れられる場面を体験し，身体接触に対する不快感を質問紙回答および生理的に測定するなどの工夫が期待され

る。

一方で，同じ IPPA を用いて愛着を測定し，幼少期の身体接触経験が多いほど現在の愛着も安定しているという仮説（3）は支持された。支持された理由として，まずは養育者像や愛着対象像の明確さが考えられる。スキンシップ尺度の直前に幼少期の主要な養育者について回答を求め，その主要な養育者から受けた幼少期の身体接触を測定し，IPPA からはその主要な養育者への現在の愛着を測定し分析した。このように，スキンシップや愛着の対象者が明確であることから，先行研究（相越，2009 ; Takeuchi et al., 2009；小野塚・桂田，2019）と同様に，幼少期に受けた身体接触の多さと現在の安定的な愛着に関連が見られたと考える。そして，この関連は成人期の愛着の基本となる内的作業モデル（IWM）で説明できる。すなわち，幼い頃に受けた身体接触は安定した愛着形成に貢献し，それが IWM となり大学生である現在の愛着につながっていると考えられる。幼少期に主要な養育者との間で体験した身体接触は，子供にとって愛情表現の反映として認知され，大学生においても肯定的かつ安定的な愛着（信頼感・コミュニケーション・低い疎外感）を築くことへ繋がったと説明できる。

本研究の限界として，まず幼少期の身体接触量を測定する手段としての回想法の限界が挙げられる。山口ら（2000）や Jones & Brown（1986）は，幼少期の親子間における身体接触の測定手段としての回想法には想起の正確さや客観性に限界があると批判している。これを踏まえると，本研究でのスキンシップ尺度による大学生の幼少期に受けた身体接触量の測定にも限界があるため，今後の研究においては，縦断研究の実施などが求められる。また，先述したように，身体接触を問う尺度における接触対象者の明確化や IWM を反映した一般他者に対する愛着尺度をも含めた更なる研究が，身体接触（タッチ），接触抵抗感や愛着に関する研究の発展に寄与すると考える。

引用文献

相越麻里（2009）．身体接触の臨床心理学的効果と青年期の愛着スタイルとの関連　岩手大学大学院人文社会科研究科紀要，*18,* 1-18.

Armsden, G. C., & Greenberg, M. T.（1987）. The Inventory of Parent and Peer Attachment : Individual differences and their relationship to psychological well-being in adolescence. Journal of Youth and Adolescence, 16（5），427-454.

Bartholomew, K. & Horowitz, L. M.（1991）. Attachment styles among young adults : A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology, 61,* 226-244.

Bowlby, J.（1988）. *A secure base : Parent-child attachment and healthy human development.* New York : Basic Books.（ボウルビィ，J. 二木　武（監訳）（1993）．母と子のアタッチメント　心の安全基地　医歯薬出版株式会社）

藤田　文（2013）．子供時代の身体接触と大学生の対人関係との関連　大分県立芸術文化短期大学研究紀要，*50,* 81-93

Harlow, H. F., & Zimmerman, R. R.（1959）. Affectional responses in the infant monkey, *Science, 130,* 421-432.

Jones, S., & Brown, B. C.（1996）. Touch attitudes and behaviors, recollections of early childhood touch, and social self-confidence. *Journal of Nonverbal Behavior, 20,* 147-163.

桂田恵美子・杉原祥子（2003）．親への愛着と性役割的性格との関係　秋田大学教育文化学部研究紀要人文科学・社会科学部門，*58,* 55-61.

Katsurada, E.（2012）. The relationship between parental physical affection and child physical aggression among Japanese preschoolers. *Child Studies in Diverse Contexts, 2*（1），1-10.

Kepner, J. I.（1987）. *Body Process : A gestalt approach to working with body in psychotherapy.* Gestalt Institute of Cleveland Press. New York. London.

Maier, A., Gieling, C., Heinen-Ludwig, L., Stefan, V., Schultz, J., Güntürkün, O., … Scheele, D.（2020）. Association of childhood maltreatment with interpersonal distance and social touch preferences in adulthood. *American Journal of Psychiatry, 177*（1），37-46.

Moberg, K. U.（2003）. *The oxytocin factor : tapping the hormone of calm, love, and healing*（F. Roberta, Trans.）. Great Britain : Printer & Martin, Ltd.

小野塚愛・桂田恵美子（2019）．愛着と被接触好嫌感の関連性　関西学院大学心理科学研究，*45,* 31-35.

酒井　厚（2001）．青年期の愛着関係と就学前の母子関係－　内的作業モデル尺度作成の試み　性格心理学研究，*9,* 59-70

清水裕士（2016）．フリーの統計分析ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育，研究実績における利用方法の提案　メディア・情報・コミュニケーション研究，*1,* 59-73

Takeuchi, M. S., Miyaoka, H., Tomoda, A., Suzuki, M., Liu, Q., & Kitamura, T.（2009）. The effect of interpersonal touch during childhood on adult attachment and depression : a neglected area of family and de-

velopmental psychology? *Journal of Child and Family Studies, 19*(1), 109-117.
戸田弘二・松井　豊（1985）．大学生の愛着構造と異性交際　心理学研究，*56*, 288-291.
山口　創（2010）．身体接触が不安に及ぼす影響　－触覚抵抗との関連－　桜美林論考　心理・教育研究，*3*, 123-132.
山口　創（2018）．皮膚感覚から生まれる幸福－心身が目覚めるタッチの力－　春秋社
山口　創・山本晴義・春木　豊（2000）．両親から受けた身体接触と心理的不適応との関連　健康心理学研究，*13*, 19-28